

Romano Guardini

Vorschule des Betens

# 祈るとは…

いろいろな祈り方を学ぶ前に



ロマーノ・グアルディーニ著

山 辺 建 訳

切です、  
物事  
どう  
せん。  
切が賜  
すると

神の  
感謝  
あい  
なるこ

ちの  
理と  
を要  
意味  
全て、  
きな  
恵の  
生き  
の意  
。感  
実現  
と見  
から

にま  
そし  
応じ  
るの

より

## 祈るとは…

人間が感謝することを学ぶことは大切です、何にもまして大切なことです。人間は、物事をすべて当たり前と受け止めるような、どうでもいいといった態度は捨てねばなりません。当たり前のことは何もありません。一切が賜物です。人間が全てをこのように理解するとき初めて、現存在は自由になります。

わたしたちは信仰を感謝する筈です。神の生命の中から改めて生まれ直した秘密を感謝する筈です。さらに、神とわたしたちのあいだに生じている隠されていること、聖なること一切を感謝する筈です。

そうです、困難なことにまでわたしたちの感謝を広げるように努力すべきです。摂理と関わりのある知らせの中で最も雄々しさを要求していること、ただし、最大の約束を意味してもいることは、起こってくることは全て、困難なことも、苦しいことも、理解のできないことも、一切が恩恵の使者であり、恩恵の形態であるということです。摂理の中で生きるとは、自分の願望には逆らっても神の意志との一致の中で生きるということです。感謝の中ではこの一致が最も清らかな形で実現します。感謝は厳しいこと、一見破壊的と見えることをも、与え手である神の手の中から受け取ります。

信仰に担われるなら、困難なことの中にまで感謝は進出していくことができます。そして、この進出がうまく行っている度合に応じて、困難なことも変容していくことになるのです。

本文より

原文における

凡例

( ) は ( ) に、

「 」 は 「 」 に、

《 》 は 「 」 に、

〈 〉 は 『 』 に、

挿入、補足を示す ― やー は ― ―― に、

語の各成分を明確にするための ― は || とした。

脚注は本文中に (原注1) などと番号を記した上で巻末にまとめた。

〔 〕 内は訳者が補った語句と注記である。聖書からの参照箇所や典礼書の語句説明などで訳者が補ったものも、本文中の〔 〕内に記した。したがって〔 〕内の「」は訳者による。他の訳注は本文中に番号を〔訳注1〕などと記した上で、巻末にまとめた。

〔英注 〕とあるのは、英訳版が補っている聖書参照箇所である。

一語の原語を用法に差のある複数の同義語を用いて訳出している場合、それらの語を―で結んでいる。

傍点はすべて訳者による。

Romano Guardini

Die Vorschule des Betens

©Alle Autorenrechte liegen bei der Katholischen Akademie in Bayern

3. Auflage 1995 Werkreihe Verlagsgemeinschaft

Matthias Grünewald, Mainz/Ferdinand Schöningh, Paderborn

# 目次

凡例

序言

## 第一章

祈りの準備と秩序

体験と実践

準備の必要性

心の統一

祈りの空間

神の面輪

外的な秩序

二 一〇 一四 一三 一〇 六

## 第二章

神の現実と祈りの四根本行為

心の統一と神の現実

神、あの聖なる方

三 五 六

## 第三章

罪責の認識と悔悛

欲求と分有

神、あの偉大なる方

礼拝

賛美

神、あの豊かで、贈りつづけ、愛しつづけておられる方

願い

感謝

繋がり

三 七 六 八 六 三 二 一〇 二四

## 第三章

至聖三位一体と祈り

神の内的生命

イエス・キリストに対する祈り

父に対する祈り

聖霊に対する祈り

二〇 一七 一三 一六

## 第四章

口 禱

祈りの言葉

一四

自分自身の祈りの言葉  
貰い受けた祈りの言葉  
反復Ⅱ滞留型の祈り

一四三  
一四四  
一五三

## 第五章

内的祈り、ないしは黙想的祈り  
黙想的祈りの特徴  
黙想的祈りの方法と進歩  
神秘的祈り

一六三  
一六六  
一六九

## 第六章

### 摂理

摂理についてのキリスト教の教え  
摂理と祈り  
祈りの生活が持つべき繋がりと摂理

一七〇  
一七五  
一七八

## 第七章

聖人たちに対する祈りと主の母に対する祈り  
聖人たち  
マリア

二〇〇  
二〇三  
二〇六

## 第八章

祈ることができない時の祈り  
生活の内的変遷に起因する困難  
信仰の危機に起因する困難

二一八  
二二五  
二二九

## 第九章

キリスト教における祈りの生活の総体的繋がり  
自己の人格においてする祈り  
典礼  
民間の信心業  
繋がり

二五五  
二六二  
二六五  
二六九

## あとがき

二七四

原注

二七六

訳注

二八〇

訳者あとがき

二八四

## 第一版への序言

祈ることは内的に必要なこと、恩恵、そして充足であります——けれども、祈ることは義務、骨の折れること、そして超克することでもあります。ですから、祈りの体験ということもありますが、祈りの練習、実践もあります。そして、祈りの泉もありますが、祈りの学校もあるのです。もっと正確に言うなら、祈ることを学ぶための複数の学校、それも様々な段階のものがあります。何よりもまず、新約聖書がスケッチしているとおり、イエス・キリストの学校があります。主のペルソナは全く祈りに浸りきっています。父からあの方へと、そしてあの方から父へという聖なる動きは途絶えることがありません。福音書はどれも幾度となくこの点に触れています。たとえば、ヨルダン川でのあの方の洗礼についての箇所とか（ルカ三・二一）、あるいはあの方が祈るために孤独の中へ退かれる様子を物語るとき（ルカ六・一二、九・一八、九・二八―二九、一一・一）、あるいは最後の晩餐について（ヨハ一七章）や、オリーブの山での一刻について（マタ二六・三六―四四）の報告の中などで。イエスの姿は祈りとこのような関係からしか正しく見ることができませんし、そこからしかあの方の生涯を理解することもできません。あの方

が表現的に祈りを話題にされたこともあります。たとえば、山上の説教の中で、異邦人たちの繰り言やファリサイ派の人々の大威張りと同じ祈りとを区別される折（マタ六・五一―六）や、弟子たちがあの方のところへやって来て、「ヨハネが自分の弟子たちに教えたように、わたしたちに祈り方を教えてください」と願い、そしてあの方が天にましますを彼らにプレゼントされるあの、心に刻むに値する一刻がそうです（ルカ一一・一二―一三）。さらには、教会がその典礼の中に設えた学校もあります。典礼とは、言葉と所作を通してなされる、装飾を省いた普通の言葉や歌われる言葉でなされる類いなき祈りなのです。この典礼は一年の推移の中で展開していき、生活全体を貫いて作用しています。しかも数千年にわたる祈りの知恵を自らのうちに蓄えてもいるのです。最後に、神との交わりのうちに生き、貴重な書物の中に自分たちの様々な経験を書き留めてくれた偉大なる聖人たちの学校があります。彼ら聖人たちは祈りの本質について、祈りの上達におけるさまざまな段階について、祈りの危険について、そして祈りの素晴らしさについても語っています。

ここにあるこの本の内容は、これらの学校が教えていることと接し合うものではありませんが、その主要な関心からするなら、そのようなこと以前に位置するものです。本書の名称は考え抜いた上で選択したものです。この書物は本当に「祈ることの入学準備」、それも、ひとつの準備たらしめとするものでしかありません。ここでは、簡単なことを学ぶのであり、それを超えていくようなことが書かれているとしても、それは事柄の完結性のために必要と見える場合に此処彼処で説明されるだけではありません。かなりの人々にはこのような入学準備はもはや必要ないであ

りましょう。とはいえ、まさにこのような人々こそ、こういった入学準備を軽視することのない人々でもありましょう。このような入学準備学級にまだ通わねばならない筈の人々は沢山います。けれども、その大部分の人々はドアを開けて教室に踏み入ることすら、殆どまだしていないのです。

どの時代も明確で力強い祈りを必要としています。わたしたちの時代は文字通り特別な意味でそうです。このような祈りの習得のためにこの小冊子が多少なりとも貢献をすることができま

すように。

ベルリンにて、一九四三年春。

## 第二版序言

第二版のために本書は念入りに見直しがなされました。全体としては内容もその展開も同じままです。けれども、叙述については幾多の変更が加えられました。これらが一層の明確さに資するものであることを希望します。

チュービンゲンにて、一九四七年春。

## 第三版から第五版までの序言

本書の考えはいずれもよく考え抜いた上でのものでしたので、新版でもそれらの考えに変更を加えるべき点を見出しません。

確かに、もっと展開したり深めたりすることのできる多くの点があるでありましょう。けれども、祈りにおいて問題の中心となるのは、キリスト教的生活の最も内奥の領域です。ところが、このような事柄は、われわれのこの書物に対して引かれてある境界のどれをも超えて行くものでありましょう。本書は「入学準備学級」への入門書となる筈のものであり、そしてこのようなクラスでは幾つかの簡単な真理しか教えることはしないものです。ただし、ここで教えられる真理はどれも本当に大切なものです。というのは、その先に来る筈のことは、全てこれらの真理を基礎としているのですから。

ミュンヘンにて、一九五六年春。